

京都大學經濟學會

經濟論叢

第六十六卷 第五・六號

- 價值論におけるリカードよりマルクスへ……………岸本誠二郎
- 保險における需要と供給……………佐波宣平
- 國際經濟の比較動學的分析……………森嶋通夫
- ズルタン「國家收入論」について……………廣田司朗
- 預金貨幣再論……………岡橋保

昭和二十五年十二月

價值論におけるリカアドよりマルクスへ

岸 本 誠 二 郎

一 勞働價值學說の二段階

勞働價值學說は時を経ることにより、それ自身理論的に整頓されるとともに、それが基礎理論となる資本主義經濟が發展變化すると、みずから變革する。スミスからリカアドに至る勞働價值學說は産業革命を挟んだ英國資本主義經濟の成立・發展期の價值論であつた。リカアド以後リカアド說を墨守せんとしたジェームス・ミル、マカロツク、ジョン・スチュアート・ミル等の價值論も同様であるが、これらはすでに資本主義經濟が基本的な矛盾を露呈する段階にあつたため、保守的な意味をもたしめられた。

基本的な矛盾は勞働と資本の對立である。この矛盾は十八世紀末葉、産業革命の進行とともに激しくなりつゝあつたが、フランスとの戰爭は好景氣によつてこれをある程度糊塗することができた。しかるに一八一五年戰爭終結以後、經濟の動搖、困難は一層甚しくなつた。一八一五、六年には戰時中の高物價が崩れ、軍需の減退とともに商品の販路は行詰り、工場の生産も打撃を蒙つた。産業革命による生産の機械化は多數の失業者をつくり出した。復員者二十五萬人の就職も困難であつた。一五、六年には工場破壊のラダイト暴動が強く現われた。一八

年にはマンチエスターにストライキが現われた。一九年には救貧法の改正も行われた。ロバート・オーウエンの運動によつて児童保護の工場法が制定されたのもこの年である。

かくなると資本主義經濟の矛盾を指摘し、これを攻撃する社會主義思想が現われるのも當然である。それは早くも十八世紀末ウィリアム・ゴドウィンの無政府主義以後現われていたが、ナポレオン戦争後はごく一般的なつてきた。

現實の經濟を説明する理論に變化の現われるのは自然であるが、價值論にも大きな轉換が見られた。そこで資本主義經濟の基礎理論たる労働價值學說の發展には二期が分たれる。前期はスミス、リカアドによつて代表される資本主義經濟の成立、興隆期のものであり、後期はマルクスにおいて頂點に達した矛盾期のものである。

價值論における前期より後期への推移は、リカアドよりマルクスへの發展であるが、この道程は必ずしも容易なものではなかつた。リカアド價值論は資本主義的には一つの頂點にまで發展したものであるが、現象の變化に應じてそのまま發展せしめようとすると、ジェームス・ミル以後の労働價值論に見られるごとくに、かえつて矛盾をつくり出すこととなつた。マルクス價值論への發展は確かに新しい時代に應ずるものであるが、それはジョン・ステュアート・ミルにおいて見られるごとく、過去の理論を形式的に整頓するのでは不可能であつた。そこには「剩餘價值」という新しい歴史的經驗の把握が必要であつた。それはスミスの段階において「労働價值」なる歴史的經驗の把握が必要であつたと同様である。

「剩餘價值」、それは後期資本主義の理論の焦點である。マルクスは資本主義經濟の祕密を解くために、「資本」及び「剩餘價值」にその研究の全力を集中した。マルクス經濟學に對抗したオーストリア學派のベナム・バウエ

ルクも「資本」及び「資本利子」の研究に全力をあげた。消耗された資本以上に何故に剰餘價值が発生するかがベエムの中心問題であつたのである。

リカアド經濟學とマルクス經濟學は價值論を媒介として壁一重で接するかのごとくである。しかしリカアド自身があの鋭い理論をもちながら、マルクスの理論に發展しえなかつたことをもつて見ても明かなごとく、兩者は、勞働價值學説もつてつながるとはいえ、そこには本質的な相違があつたのである。マルクスはリカアドを徹底的に研究したが、より一層成長するためにはリカアド以外に彼を超えるところの先驅的思想を必要としたのである。この先驅的思想の役割は「剰餘價值」という歴史的經驗をはつきりと示すことにつきた。

ここにマルクス自身の研究に變化のあることも注意しなければならぬ。マルクスの最初の經濟理論は一八四七年の『哲學の貧困』のうちに示されているが、ここではその多くの理論がリカアドによられている。價值について述べられているところでは次のように説かれている。即ちまず效用を前提するならば、勞働は價值の源泉である。勞働の尺度は時間である。生産物の相對價值はその生産に投ぜられなければならぬ勞働時間によつて決定される。價格は生産物の貨幣で表現されたる相對價值である、という。これは全くリカアド理論である。この書物はリカアド理論によつてブルードンを批判することを主題とする。マルクスによるとリカアドはわれわれに對して、價值を構成するところの市民的生産の現實の運動を示しているが、ブルードン氏はこの現實の運動を抽象している。リカアドの價值理論は現代の經濟生活の科學的説明であるが、ブルードン氏の價值理論はリカアドの理論の空想的解釋である、というのである。²⁾

マルクスは賃金論についてもリカアドを踏襲している。それによれば勞働はそれ自身が商品であるのだから、

それはそれ自身労働なる商品の生産のために必要なる労働時間によつて測られる。しからば労働なる商品の生産には何が必要であるか。それは正に労働の繼續的維持に、即ち労働者をして彼の生活を保ち、且つ彼の種族を増殖するをえせしめるために缺くべからざる物品の生産に必要な労働時間である。労働の自然価格は賃金の最小額に外ならない、というのである。これも大體においてリカアドの理論である。

賃金と利潤との相反的變動についてもリカアドに従う。即ち賃金の一般的騰貴は多かれ少なかれ、商品の一般的騰貴をもたらすものではありえない。實際、もしすべての産業が固定資本に比例して同数の労働者を雇傭するならば、賃金の一般的騰貴は利潤の一般的低下を生ぜしめ、商品の市場価格は何らの變化を蒙らないであろう。尤も固定資本に對する手労働の割合は、種々の産業において等しくないから、比較的より大なる固定資本とより少ない労働者とを利用するすべての産業部門は、おそかれ早かれ、その商品の價値を引下げざるをえないであろう。反對の場合にはその商品の價格が低落しないならば、その利潤は平均利潤率以上にでるのである⁴⁾。これも全くリカアドの理論である。

一八四七年にブラッセルで講演され、四九年四月に『新ライン新聞』に連載された『賃労働と資本』においても、労働と労働力は混同されており、賃金と利潤との相反的變動關係はリカアド説のまままで述べられている。

もとより『哲學の貧困』においてさえ、徹頭徹尾リカアドの祖述というわけではなく、すでに相當に『資本論』經濟學に至る思想の萌芽は認められる。使用價値と交換價値の問題においても交換價値の前提としての效用以外に、兩者の對立矛盾にも注意を向けている。よく問題とされるように労働と労働力とは混同されているが、複雑労働の單純労働への還元は鮮かに説明されている。經濟的範疇は單に社會的生產關係の理論的表現にすぎないと

いう思想も出来上つているのだから、その點からやがてリカアド理論が根本的に變革されることも十分に想像される。生産力と生産關係の矛盾から社會發展を説く唯物史觀も、ほぼ完成された形でこれを見ることが出来る。⁵⁾『賃労働と資本』においても、資本は一つの生産關係だということが、あの有名な、ニグロはニグロだという例によつて説かれてゐる。だからこれが『資本論』經濟學として出現するのは時日の問題であるといえよう。

しかしここで特に注意すべきは、剰餘價值理論は未だ出来上つていない點である。思想として社會主義の立場はできてゐるが、理論的にはそれは賃金と利潤の相反的變動のリカアド説を借りて説明されたようである。またブルードン批判の手がかりとしてブレイの労働全收益權論を紹介批判してゐるが、これは交換關係と生産關係の矛盾、觀念と現實の矛盾の理論によつて批判してゐるので、剰餘價值説によつてなしたものではない。試みにこのブレイ批判を『剰餘價值學說史』におけるホヂスキン批判と較べて見るならば、その點が一層明かであろう。剰餘價值理論は労働價值の理論から貨幣と資本、不變資本と可變資本、労働と労働力の理論的武器が確實に得られてから築かれるものである。

そこでマルクスにとつては剰餘價值の思想を固め、さらにそれを理論化することが必要であつた。彼の研究遍歴の記録である『剰餘價值學說史』を見ると、その先驅的思想家として三人のパンフレット作者(Pamphletist)をあげ、その思想内容を検討してゐる。第一は匿名の「パンフレット作者」(Pamphletist)をあげ、その思想内容を検討してゐる。第二はピアシー・レヴンストーン(Pearcy Ravenstone)第三はトマス・ホヂスキン(Thomas Hodgskin, 1786-1869)である。マルクスの検討は他の場合と同様に徹底的である。彼はこの研究から何を得たであらうか。

前二者は世間の注意をひかないものであるが、ホヂスキンは餘りにも有名である。

- 1) A. Small, *Adam Smith and Modern Sociology*, 1907, p. 110 et seq.
- 2) K. Marx, *Das Elend der Philosophie*, 10 Aufl. S. 15, SS. 21~22
- 3) Marx, op. cit. S. 24
- 4) Marx, op. cit. S. 135
- 5) Marx, op. cit. SS. 90~91

二 ホヂスキンの價値論

ホヂスキンがその著『勞働擁護論』(一八二五)において説かんとするところは、資本は不生産的であるということ、従つて今日資本が與えられているところの國民生産物中の大きな分前に與かる權限を否定するということ、資本による利得を許す理論を勞働者が反對するにいたるまでは、勞働者の状態は永續的に改善され得ないということであつた。ことに資本の不生産性を論證することが基本的な理論になるが、これは剩餘勞働價値説により、且つ流動資本と固定資本に關する資本理論によつてなされたのである。

ホヂスキンの説くところによれば、われわれの熟練と知識の増大によつて、勞働は今日二百年以前よりは恐らく十倍以上も生産的である。しかも實にわれわれは奴隸が當時受取つていたと同じ報酬で満足させられている。われわれの改善の利益はすべて資本家と地主に歸しているのである。

ホヂスキンはリカアド經濟學に従い、利潤と賃金が分配上對立することから出發する。即ち賃金は利潤とは逆に変動する。賃金は利潤が下落するときに騰貴し、利潤は賃金が下落するときに騰貴する。従つて國民生産物の分配において資本家の分前たる利潤と勞働者の分前たる賃金とが對立することとなる。

資本は労働者の單なる生活資料と肥沃な土地の剩餘生産物とを除き、一國の全生産物を獨占するものであるが、それは「労働の生産物」であり、「労働者の食べる食物と彼の使用する機械」であるといわれる。資本は何故にこのような莫大な部分をえる不思議な性質をもつていたのであろうか。ホヂスキンはそこで資本の本質を追求する。

資本は流動資本と固定資本に分けられる。流動資本はマカロツクなどによると労働者に生活資料を供給するものであるから、労働者はそれによつて現在の生活資料が保證されるので、彼の能力を最も有利な點に向けることができ、より生産的となるといふのである。しかしホヂスキンによると、この利益は共存的な労働 (Co-existing labour) によつてもたらされるものである。商品の眞の生産者たる労働者はその保證をば、彼の有する次の知識から引出す。即ち彼を働かせる人が彼に支拂つてくれ、そしてその貨幣で彼の必要とするものを購買することができであろうという知識である。實際彼は商品の貯えをもつていないし、また彼を雇う人も殆ど貯えをもつていない。労働者の必要とする生活資料はその時々つぐられ、それが労働者によつて買取られ消費されるのである。労働者は蓄積された資本に依存するのではなく、異なる種類の共存的な生産的労働に依存するのである。すべての種類の人々は各人が自分の特定職業に従事しているあいだ、他のある人々が自分の直接の且つ將來の消費と使用にとつて必要とするところのいかなるものも準備してくれるであらうという十分な確信をもつて毎日働いているといふのである。

固定資本はどうであるか。ホヂスキンによれば固定資本を用いると、人はその力を驚くべく増加するといわれている。しかし道具や機械も労働の生産物である。ところが經濟學者達のいうところでは、道具や機械は先行勞

働の生産物であり、そして節約または貯えられたものであるが故に、利潤を受取る権利を與えられているというのである。しかし道具や機械の製造は食物や衣服の製造と全く同様に、絶えず行われている。それらのものは一年内にすべて消費され使用されてしまうものでなく、それらがつくられた後、できるだけ速かに使用されるのである。それは貯蔵されておかれるものでない。それらのものは單に先行労働の結果であり、労働者によつてそれぞれの用途に用いられないかぎり、それらのものはその製作費を拂戻さない。それらのものが利潤をもたらずのは、かく用いられるときのみである。かくして固定資本はその效用を先行労働からでなく、現在の労働から引出すのである。そしてその所有者に對して利潤をもたらすのは、それが貯えられていたからではなく、それが労働に對する支配力を獲得する一手段であるからである。資本は人々をその前に跪せしめる一種の偶像である。私本の生産性を説くものは、大工が斧と鋸とをもたないならば、何をなすことができるかということであろう。私はこの質問を逆にして、大工がいなければ斧と鋸は何をなすことができるかとたずねるものである。鑄と腐蝕がその答でなければならぬ、とホヂスキンはいう。

そこでホヂスキンが進んでいうところでは、労働の生産するところのものは労働に屬すべきである。労働は労働者のものであり、その生産物は彼等のものであるべきであり、そしてひとり彼等のみが、各人はすべての生産物のうちのどれだけを當然うべきかを決定すべきである。しかし彼の労働によつてつくつた食物と道具とは、單にその所有者を變えるだけにより、彼の生産力より、より大なる生産力を與えられるという學說、そしてそれらのものの所有者はそれらのものを生産し使用する労働、熟練及び知識よりも、より豊かな報酬を受けるという學說を斥けなければならぬ、というのである。

ホヂスキンの以上の議論はマルクスが分析したように不完全である。まず資本の生産力について、使用価値と価値の生産が混同されている。資本を用いて生産が増加するというとき、使用価値の増加と価値の増加の關係が不明であるから、剰餘價值形成の内容が明かとならない。使用価値と価値の生産の區別の不明瞭は、資本の社會的歴史的本質の理解の不明瞭と關連している。資本は神祕的な偶像とされているにとどまり、その作用が分析されてはいない。共存的勞働の理論も不十分である。所謂共存的勞働は他面から見れば分業であり、種々なる勞働の同時的存在である。これが流動資本と置替えられるのは、生産が商品生産であり、人々は自分で生産しない消費財貨を市場において見出すことを前提しているからである。資本主義的生産においては勞働者の生産する生産手段と生活資料は、固定資本と流動資本として勞働者に對立し、これらのものが資本家の所有として現われ、且つ勞働者の生産する価値の一部が勞働者に歸り來る。このことが勞働者のための流動資本の『蓄積』と呼ばれるものである。しかも勞働はその時々共存的勞働のみならず、過去の勞働にも依存する。ホヂスキンは現在の勞働と資本との對立を強調するの餘り、この歴史的な資本の性格を看過した。

ホヂスキンは使用価値と価値の區別の不明瞭、並にそれより生ずる以上の結果において、リカアドより一步後退しているが、それにもかかわらず剰餘價值を確認した點において一步前進している。しかもこれはいわば革命的な前進である。リカアドは利潤を當然自明な存在と考へ、價值論によつて説明せず、むしろ價值を修正する要素として作用せしめた。これがマルサスなどによつて攻撃されたところである。しかるにホヂスキンにおいては價值は勞働のみによつて生じ、それ以外にはどこからも生ぜず、従つて資本も價值を創造しない。資本が現に獲得する利潤は勞働が形成した価値の横取りに外ならない。利潤となる剰餘價值は剰餘勞働である。リカアドは勞

働價值學説を基礎として、利潤と賃金の變動の相反關係を説いたが、しかも遂に利潤が剰餘勞働價值であることを斷定しなかつた。しかるにホヂスキンは議論は粗雑であるが、利潤が剰餘勞働價值であることを斷定した。

これは大きな轉換を意味する。リカアドにおいては勞働價值學説によつてその基礎を説明される現在の經濟組織を大體において是認する結果となつていたが、ここに資本家は勞働者に當然歸屬すべき價值を不當に横取りしていることとなり、従つてこの資本私有を除き勞働收益は全部勞働者に收むべきであるという社會主義的要求が現われることとなつた。もとよりその基礎となる經濟理論が精密でないから、その間隙はいまだ多分に彼の自然法の思想によつて裏づけられていた。即ち個人の自利と自由競争がゆるされるならば、自然的調和の社會が實現するという樂觀的哲理が、彼の勞働全收益の議論の基礎に横つて、たえず議論の缺陷を補つていた。ここではそれに立入らないであろう。注意すべきは勞働價值學説の性格の變化である。即ち勞働價值學説は元來資本主義經濟の成立の基礎を明かにし、その生産力を増進する要訣を示す理論であつたが、ここに至るとそれは資本主義經濟の矛盾を示し、その社會主義への道を明かにする理論に轉化することとなつた。

ホヂスキンの勞働價值説がマルクスの勞働價值説に及ぼした影響はしばしば問題にされるところである。マルクスはホヂスキンの議論を幾度か顧みているから、影響はあつたろうが、荒けすりのホヂスキンの議論と極めて精密なマルクスの理論とを比較すると、その個々の點では少なからざる開きがある。

ホヂスキンは商品價值が勞働を源泉にすると考え、従つて賃金、利潤、地代は商品價值から分解して形成されると一應考えながら、時として商品價值が賃金、利潤、地代から合成されるというスミス説に歸することもあつた。⁸⁾

商品價値の唯一の源泉が労働であると解する點において、ホヂスキンはマルクスの先驅をなすが、ホヂスキンはこの同じ労働が富の唯一の源泉であるとも考えていた。マルクスの重要視した價値と使用價値の區別は無視されていたのである。これは理論上は労働の精密な規定を怠つたからである。マルクスは商品を分析し、使用價値をつくる労働と價値をつくる労働とを區別したが、この理論はホヂスキンにはなかつた。資本家と労働者の分配關係や、共存的な労働關係を重要視したから、その點から労働の社會性を把握していたともいえようが、使用價値と價値の區別を知らず、従つて價値をつくる労働の抽象的人間労働として歴史的な性格を有することを看過した。資本主義社會における労働者の分前と奴隸經濟における奴隸的分前とが單に量的に比較されたとどまるのも、労働の歴史的な性格が理解されていなかつたことを示すものである。もとより量的規定についてもマルクスの社會的必要労働の見解は現われておらず、個別的労働にとどまつていた。資本概念が從來の物的蓄積の觀念以上に労働と資本との社會關係たることに注意を向けながら、それが歴史的なものであることに思ひいたらなかつたのも、マルクスに劣ると言わなければならぬ。

しかしホヂスキンはマルクスに對する先驅者として二つの注意すべき見解を有した。第一は價値形成における生ける労働の意義である。彼が資本の不生産性を強調したのは、對象化された労働の特權を否定し、生ける労働の生産性を主張することとなる。これはリカアドにおいてもそうであつた筈であるが、彼はこれを分配にも貫かず、その意味が抹殺された。ホヂスキンはその議論は單純だが、この點を貫いた。マルクスにおいては生ける労働と對象化された労働の區別は一層明かとなり、これは可變資本と不變資本の區別による資本主義的生産の理論に發展した。

第二は剩餘價値の思想である。リカアド經濟學では投下労働價値學説を基本理論とするのだから、剩餘價値が剩餘労働によつて發生するごとくであつたが、リカアドは利潤の根源を示さず、剩餘價値思想は展開されなかつた。ホヂスキンはこの點ではリカアド批判者の立場に立ち、利潤が剩餘労働價値であることを強調した。その議論は粗雑であるが力強いものである。これはマルクスの剩餘價値學説の理論的先驅とまではゆかないが、理論の方向を示したものととして意味深きものである。強固なりカアド經濟學から抜け出すには、まずその方向を示すことが重要なのであつて、あとはマルクスの精密な推論に待つわけである。この點におけるホヂスキンの役割は十分に認められてよいものであらう。

- 1) T. Hodgskin, *Labour Defended against the Claims of Capital*, (1825), ed. by G. D. Cole, 1922, pp. 22~23, 鈴木鴻一郎譯、一八頁
- 2) Hodgskin, op. cit. pp. 27~28, 鈴木譯、二二頁
- 3) Hodgskin, op. cit. pp. 31~32, 鈴木譯、二六頁
- 4) Hodgskin, op. cit. p. 25 et seq. p. 52 et seq. 鈴木譯、二九頁以下、四二頁以下
- 5) Hodgskin, op. cit. p. 80, p. 90, 鈴木譯、六六頁、七一~七二頁
- 6) Marx, *Theorien über den Mehrwert*, III, S. 313 ff.
- 7) cf. E. Lowenthal, *The Ricardian Socialists*, 1911, pp. 67~72, pp. 82~83, *Brief Hodgskin an Ponce vom 28. Mai 1820*, (C. Koeppe, *Das Verhältniss der Mehrwerttheorien von K. Marx und T. Hodgskin*, 1911, Anhang, S. 160)
- 8) C. Koeppe, op. cit. S. 28
- 9) C. Koeppe, op. cit. SS. 30~34

三 一匿名氏とレヴンストーン

マルクスの注意をひいたものでは、剰餘價値の思想はホヂスキン以前に一八二一年に出版された一匿名氏のパンフレット『國難の原因及びその救済策云々、ジョン・ラツセル卿への手紙』(The Source and Remedy of the National Difficulties etc. A Letter to Lord John Russell) に現われている。マルクスによるとこの匿名氏はリカアドを超えて本質的前進をなしている。それは結局剰餘價値の認識の一點にある。匿名氏によると資本家にどれだけが歸屬するかというに彼は労働者の労働の剰餘を取得しうるにすぎない。何となれば労働者は生きてゆかなければならないから。そこでもし労働者がパンの代りに馬鈴薯によつて生きてゆかざるをえなくなると、彼の労働からより多くのものが要求されることは疑いないところである。言換えると労働者がパンで生きていた間は、彼自身及びその家族を養つてゆくために、月曜日と木曜日との労働を費すことを餘儀なくせられるに反し、馬鈴薯で生きてゆくときには、月曜日の半分だけを自分のものとし、他の半分と木曜日の全部とは國家または資本家のための労働に使われうることになるというのである。

ここに利潤その他は、労働者がそれに對して何等の等價物を受けとらない労働時間の取得であるということになる。即ちこれは労働者の労働力の價値を償ふところの労働量を超えて、またはその賃金に對する等價物を生産するだけの労働量を超えてなされるところの労働である。價値を労働に歸せしめることが重要であつたと同じように一の剰餘生産物に表現せられる剰餘價値を剰餘労働として示すことは重要なことである。實際のことはすでにアダム・スミスにおいて述べられており、またこれはリカアドが發展せしめた主要要因である。しかし彼は

どこにもこれをしつかりした形で説明してないのである。この點こそマルクスがリカアドを超えて求めたところであり、一匿名氏のパンフレットの價值を認めるところである。このパンフレットは決して理論的な研究でなく、その説くところは粗雑である。しかしこの著者はリカアドの土臺に立ち、その體系自體のうちに含まれている結論を矛盾なく述べているにすぎないのであつて、これをもつてこの結論を資本家に反對して、勞働者階級のために使われるようにした。マルクスはその理論的武器、剩餘價值を率直に示した點に、このパンフレットの意義を認めた。

レヴンストーンの二四年のパンフレット、『減債基金並にその影響に關する考察』(Thoughts on the Funding System and its Effects)もマルクスは非常に注目し値する著述であるとなしてゐる。レヴンストーンによれば、勞働の生産力の發展は資本または財産をつくる。即ち無爲の勞働者のために剩餘生産物をつくる。資本は他人の勞働の生産物に對する支配である。ここでも資本家の獲得する剩餘價值が剩餘勞働であることが指摘された。マルクスはその點に強い注意を向けた。

以上の三人は彼等の議論のたて方は異なるが、リカアド經濟學を發展させて剩餘價值を導き出した點では共通する。ホヂスキンは資本は不生産的であるという命題に到達している。これは勞働は價值の創造者であるというリカアド説の必然的歸結である。匿名のパンフレット作者もリカアドから正しい結論を引き出し、剩餘價值をもつて剩餘勞働に外ならないとなしてゐる。レヴンストーンは勞働の生産力の發展程度の點から相對的剩餘價值の形成を認識した。リカアドも同じことを言つてゐるのではあるが、この結論をさげた。マルクスはこれら三人の先驅的思想を見逃さなかつた。

★ ここにウィリアム・タムソン (William Thompson) についで論及しておく。タムソンは一八二四年出版の『富の分配の原理の研究』(An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth, 1824) その他に、一種の剰餘價值説を唱えた。彼によると、富は労働によつてのみ生産される。労働以外のいかなる要素も欲望の對象物を、富の對象物たらしめない。労働は富の唯一の一般的尺度である。自然の作用は何ものをも富の對象物たらしめない。その働きはすべてのものの生産に平等に作用するから。彼は價值の二つの要素として效用と労働費用をあげるが、後者についてのみ考慮を拂う。また價值を構成する労働は費された労働のみでなく、節約された労働もある。價值尺度について、労働は唯一の一般的尺度であるが、欲望は變動しやすいから、労働は必ずしも正確なものではない。欲望の變動する財貨や稀少財貨を除くと、自由に再生産しうる財貨の多くは、静態の社會においては、通常の判斷によつて使用された労働が、正確な尺度である。剰餘價值についてはタムソンの考えるところによる。最も良好な事情のもとでは、労働者の労働生産物の半分が利潤及び地代として彼から引き出される。利潤の源泉は労働以外にはない。尤も労働者は資本の使用に對して支拂わなければならぬと考えるが、その場合の資本の生産力については言及しない。

以上のタムソンの思想のうちには明かに剰餘労働價值の思想が現われている。そこでアントン・メンガーなどはこの思想がマルクスに影響を與えたことを説く。タムソンは普通にリカアド派社會主義者と稱せられるもの一人として挙げられることからして、マルクスに對する影響も考えられるようである。しかしタムソンの二四、五年の著書が「剰餘價值學說史」において三人のパンフレット作者に並べて検討されていないことには注意を要すると思う。第一に彼の經濟學には「剰餘價值」なる言葉と思想とが現われているが、リカアド經濟學とはその性格を異にし後の效用學說に近い主觀主義的性格を多分に備えている。所謂快樂主義的な幸福の測定、後の厚生經濟學の先驅をなすものと考えられる。第二に剰餘價值思想の一點でなく、これを包む全體の思想に擴大してみると、これは明かにマルキシズムに發展するものでなく、オーウエン主義である。彼の協同主義の社會建設案は勞資協同的である。剰餘價值の思想でも勞資の終局的對立の上に立つマルクスの剰餘價值説とは異なると云わなければならぬ。マルクスはレヴンストーンを論じたところで、彼等パンフレット作者と經濟學者オーウエン等を對照しているが、それによると經濟學者は社會發展の對立を永久化せうと望み、パンフレット作者達はこの對立から難脫せんがためにこの敵對形態に成長せる成果を犠牲に供せんと決心した。この點において經濟學に對するこの反對論は同時代のオーウエン等のものと區別せられると述べている。マルクスはオーウエン主義の贊成者タムソンに對しても同様の考えをもつていたであらうし、従つて三人の

パンフレット作者ほどの價値を認めなかつたと考えられる。グレー (John Gray) とブレイ (John Francis Bray) といふことも同様である。

基本的な理論の發展には現實經濟の變化が推進力となるようである。發展は矛盾の克服の運動であるが、現實經濟の發展は固定化さんとする理論を葬つて、みずからを説明する新しい理論を要求する。古い理論もそれが最高の段階に達しているときは、無意識的にもそのうちに矛盾の要素を収めているが、ここにそれが意識化され、自己分裂を起す。その端緒は新しい歴史的經驗に基くところの多分に直觀的のものであるが、それが漸次理論的なものに整備される。三人のパンフレット作者はこの端緒的な直觀の段階であるが、彼等はマルクスの理論的體系が展開されるに極めて重要な導火線となつた。リカアド並に三人のパンフレット作者の時代はこの轉換の端緒となるときであつた。

マルクスはこの轉換について次のように述べている。即ち從來の經濟學にこの理論的に無反省な表現を與えていたその同じ現實發展が、自分自身のうちに含まれている現實の矛盾を發展せしめる。特に英國における増大する國富と増大する労働者の貧困との間の對立を發展せしめるといふことは明かであつた。更にリカアド說その他におけるこの矛盾が、たとえ無意識的のものではあるとしても、理論的の響きを與える表現をとつていたのであるから、プロレタリアートの側に立つた人々が彼等のために理論的にすでに準備せられた矛盾を拾ひ上げたといふことは自然なことであつた。労働は交換價値の唯一の源泉である。そして使用價値の唯一の能動的創造者である。そう君達は論するのである。他方において君達は資本がすべてである。労働者は無かまたは資本の生産費の一部分にすぎないという。君達は君達自身に矛盾している。資本は労働者の詐取以外の何ものでもない。労働はす

へてである。——これは實際、リカアドの立場に立ち、彼自身の前提の基礎の上において、プロレタリアートの利益を代表するところのこれら著述の最後の言葉である、とマルクスは述べている。

- 1) Marx, Theorien über den Mehrwert, III, S. 281 ff. 改造社、全集版、譯、二八六頁以下
- 2) Marx, op. cit. S. 306 ff. 同上譯、三一〇頁以下
- 3) Marx, op. cit. SS. 316~317, 同上譯、三二〇頁
- 4) E. Lowenthal, The Riardian Socialists, 1911, pp. 30~32, pp. 35~36.
- 5) アンタム・メンガー(森戸辰男譯)『全労働收益権史論』第五章、C. Koeppe, op. cit. SS. 95~96.
- 6) Marx, op. cit. SS. 310~311, 同上譯、三二四頁
- 7) Marx, op. cit. SS. 308~309, 同上譯、三二二頁

四 價值論におけるリカアドとマルクスの異同點

われわれはリカアドの『經濟學原理』を読み、つづいてマルクスの『資本論』を読むならば、兩者の間に極めて近似する諸點のあることを認めるとともに、また越ゆべからざる開きのあることをも感ずるのである。ある論者は前者を強調するが、他の論者は後者を力説する。兩者はともに眞實である。ともに労働價值學説を固守する點において共通し、マルクスが特に剩餘價值をあらゆる努力を拂つて明示する點において全く異なる。これは從來も種々な點につき、種々な角度から論ぜられたところである。價值論に關連してその若干をあげてみよう。

ローゼンベルグがその著『價值理論家としてのリカアドとマルクス』において説いているところによると、兩者はまず労働をもつて價值の源泉あるいは實體となした點で一致しているが、リカアドは労働以外に稀少性をも

つて交換價値の源泉と見なしている點で異なる。しかしこの差異は大して重要でない。というのは稀少性財貨は獨占價格を有するという點では兩者共通している。これはマルクスにとつては一つの擬制的價値であり、社會に對し社會的勞働のより大なる分前を獲得せしめるところの、その所有者の手にある權力手段にすぎない。それ故稀少性はマルクスにとつては分配要因であつて、勞働、従つて價値の分配を稀少性財貨に有利に影響を與えるものである。しかしリカアドが稀少性を交換價値の源泉として述べるときには、彼は價値現象を私經濟的觀點から見てゐるのである。一財貨の所有者にとつては、稀少性はたしかに交換價値の源泉であるが、社會はそれによつて利益を得ない。この點はリカアドも「價値と富」を論ずるさいに認めていたところである。曰く、稀少財貨を有するものは、もしそれによつて人間生活の必需品および享樂品をより多く支配しうるならば、より富んでゐることは事實であるが、しかし各人の富の源である全體の存在量は、個人がそれから除去つただけ減少する。他の人々の分前はこの特に恵まれた人が、より多くの數量を専有しうるだけ必ず減少せざるを得ないのである、と。従つてリカアドは交換價値に二つの源泉を考えたものではあるが、稀少性の要素は明かに從屬的に考へていた。

次に價値をつくる勞働についてハルゼンベルグによると、マルクスは社會的必要勞働を考へるが、リカアドは社會的に必要な勞働が社會的需要を前提にした最も不利なる事情のもとにおけるものと解してゐる、といふのである。また必要勞働量についてリカアドはすべての勞働が生産的であつて、生産物の本來の造出に投ぜられた勞働と完成生産物の分配、運送に投ぜられた勞働とを區別しない。マルクスはこの二つを區別し、前者のみを價値生産的勞働とし、後者は費用、流通費用で、價値よりの控除であると考えた。

勞働の生産性についても價値と富の區別より、すでにリカアドによつて明かにされ、マルクスによつて更に形

式化され、商品の價値は勞働の生産力に逆比例するとされ、勞働の生産力の上昇の意味は生産物の低賤化にあると考えられた。

資本について、その意義ならびに生産におけるその職能については、兩者同意見だとローゼンベルグは解する。即ち資本自身は何ら價値をつくらず、しかもすべての生産にとつて絕對に必要である。その職能は勞働を働かしめ、勞働行程を可能とし、勞働の生産性を上昇せしめるにある。資本による生産の結果は資本家に屬する。それによりそれ自身増殖され、その所有者に収益、即ち利潤を與える職能を示す。ところが資本はマルクスにとつては一つの貨幣額で、それがその所有者に剩餘貨幣をもたらし、増殖されるように、彼によつて利用されるものである。すべての資本はその經歷を貨幣として始め、剩餘貨幣として終る。リカアドにとつては貨幣形態は資本決定にあたり重要ではない。反對に彼にとり資本の自然形態は完成使用價値、生産物の形態であつて、一定種類の利用により資本となるものである。この點では彼らは再び一致する。資本概念に關する兩者の意見の相違の原因は、彼らの貨幣理論の差異にある。そしてその結果は資本の流通行程についての彼らの意見の原理的差異にある、とローゼンベルグは解した。

なお資本についてリカアドは流動資本と固定資本の區別に着眼したにとどまり、マルクスのなした不變資本と可變資本の區別を明かにしなかつた。これは剩餘價値決定において指針となるものである。リカアドは勞働價値論者として事實この區分を扱ひながら、立入つて説明しなかつた。リカアドにおける剩餘價値と利潤の混同もこれに關連していた。その結果はさらに價値と生産價格の混同ともなつた。

賃金については、賃金は彼らにとり勞働によつて生産された價値の一部分であつて、正常状態では生活最低費

に等しい。リカアドにとりこれは労働の自然價格であるが、彼は既に支出された労働と労働力との間の區別を知らず、これが多くの誤解を生んだ。マルクスはこの點を明確に區別した。そこでリカアドでは賃金法則は一つの自然法則であるが、マルクスではそれは資本主義秩序の歴史法則である。

ロートゼンベルグによると、リカアドとマルクスの間には多くの類似點があり、マルクスはリカアドを基礎としているが、他方において兩者の間に大なる差異のあることも看過してはならない。マルクスの獨創性を否定し、單純にリカアドの忠實な學徒となすは誤である。リカアドとマルクスの價值論の無數の相違點は、その原因を次の四點に歸しうる、とローゼンベルグはいう。

第一、兩者が價值現象を見、かつ扱う觀點の相違。即ちリカアドは個別經濟の立場に立ち、價值現象をただ個人主義的のみ觀察した。價值論を發展せしめるには、この立場をかえることが前提となる。マルクスはこれを果した。彼は個別經濟的觀點をすてて、一般經濟的・社會的立場から研究した。

第二、絶對價値の取扱いの差異。リカアド價值論の第二の大缺點は絶對價値の看過にあり、マルクスはこの點を見事に解決した。リカアドがなしたように價値の基礎、生産行程を表面的に不十分に扱うことは、労働價値學說のような客觀價值學說にとつては誤であり矛盾であることが最初から明かであつた。マルクスは資本の生産行程を基本課題として取上げることにより、廣汎な新しい研究分野が開かれ、そこで労働價値の原理の十分な展開が可能となつた。ここにマルクスの大なる功績があつた。

第三、リカアドにおける歴史的意味の缺如。これはマルクスの歴史的、辯證法的取扱いに對する彼の停滞的論理となつた。

第四、マルクスの個有な、獨特の貨幣論とそれより生ずるところの資本概念に關する彼らの意見の差異。マルクスは全社會的資本を貨幣によつて濾過することにより、即ち彼はそれを貨幣より出でて貨幣に復歸せしめることにより、彼の價值論とリカアドのそれとの間に一連の原則的、かつ基本的な開きが生じた。かくしてマルクスにおいては資本の循環についての特別な方式、生産行程と流通行程との嚴密な區分、生産的勞働と不生産的勞働の區分が生じた。

要するにマルクスは勞働價值學說の研究と發展において、リカアドの直接の後繼者である。リカアドの價值論がなければ、マルクスの價值論も不可能であろう。しかしマルクスの價值論はリカアドの價值論の新版でなく、獨立の、獨創的のものである、とローゼンベルグは結論した。¹⁾

ローゼンベルグの所論においてリカアドの價值を決定する勞働を最も不利なる事情のもとにある勞働と解する點、ならびに絶對價值の認識が缺けていたとなす點には疑問がある。リカアドが絶對價值を認識していたことは別に述べるが、それは發展せしめられずして終つたことは確かである。彼は分配論を偏重した結果、勞働價值學說のよつて立つ生産行程の分析を怠つた。絶對價值の問題から生産行程の分析に進まなかつたことが、リカアドをしてマルクスより後れしめたこととなつてゐる。それにしてもローゼンベルグが兩者の相違の原因としてあげる四點は肯綮にあたる。しかしそれらは相互に關連してゐて、それらの一つが眞に把握されるならば、他の點もおのずから生ずるのであらう。

カール・デイルもその著『リカアド經濟學研究』においてリカアドとマルクスの價值論の異同を論じた。まづ兩者の共通點として、第一に、兩者が價值論に提出した課題は、彼らが平均價格の構成に對して終局的に決定

を興える法則を見出すことである。即ち終局において價格を規制するものは、價值實體であつて、それは商品に含まれたる社會的に必要な勞働時間である。

第二にリカアドと同じくマルクスもまた彼の價值論の妥當範圍を著しく限定し、土地、骨董品、藝術品等多數の物品が價值概念のもとに含められなくなつた。

第三に兩者は客觀主義的價值論であつて、價值尺度として商品の生産における費用が取上げられている點で共通する。その他の點ではマルクスの學説はリカアドの學説から甚だしい差異を示す。

次に兩者の差異點としてあげられたところによると、第一にリカアドに對しマルクスは彼の價值法則を經濟生活の一定の段階に對してのみ提出した。言換ればマルクスにおいては價值法則は歴史的意思を有するが、リカアドにおいては普遍的意味を有する。リカアドにとつては人間が經濟し交換するところでは、交換は勞働價值によつて行われる。價值法則は經濟生活のすべての形態と時代に妥當する永久法則である。マルクスにとつてはこれとは全く異なり、一定の生産關係に對する法則であるにすぎない。即ち價值法則は商品生産の時代のみ妥當するにすぎない。

第二にマルクスはリカアドとは反對に價值を全く交換價值から引離して客觀化した。リカアドの扱つた價值は相對的な性格を有し、使用價值以外に彼は單に價值とも呼ぶところの交換價值を知つていたが、これは商品が相互に交換される割合であつた。マルクスは質的に異なる勞働に對して無差別の平均勞働、社會的に必要な勞働を考へた。リカアドは個々の商品の價值を一般的に決定しえなかつた。けだし彼は統一的なる價值量をもたず、商品Aが商品Bに對しいかなる關係にあるかを知らんとしただけで、Aの價值をそれ自身がいかなるものである

かを知らんと欲しなかつたから、彼の價值論を基礎として統一なる價值量を得ようともしなかつた。

第三にマルクスとは反對にリカアドは剩餘價值學説をたてなかつた。マルクスはリカアドが剩餘價值學説を全面的には説かなかつたが、部分的に説いたと指摘している。リカアドは剩餘價值を利潤や地代などのその特殊形態とは獨立にそれ自身として研究しなかつた。

勞働價值學説の妥當範圍については別に論ずるであらう。またリカアドは單純に相對價值だけにとどまつていなかつたことも別に論ずるであらう。デイルの比較論は種々な點について詳細であるが、それだけに焦點となり、決定的となるものがどこにあるかが十分に説明されていないようである。

1) J. Rosenberg, Ricardo und Marx als Wertheoretiker, 1904, Ss. 109-128.

2) K. Diehl, Sozialwissenschaftliche Erfahrungen zu D. Ricardos Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung, I. 3. Aufl. S. 94 ff.

五 兩者の異同の決定點

リカアドとマルクスの經濟學は從來學者の指摘するごとく、多くの類似點とともに、また多くの相違點を有する。それがあるいはリカアドをしてマルクスの先驅者とさせ、またあるいはマルクスをしてリカアドの批判者、克服者とさせたのである。マルクスがリカアドより前進していることは明かであるが、兩者の間に多くの異同點があるにもかかわらず、彼らの取上げた問題の焦點において、これらの異同を貫くところの決定的なるものが二つある。一つは生産論の課題であり、他は剩餘價值の追及の課題である。

生産論は近代經濟學の中心課題であるが、リカアドにおいては中心課題が分配論に切替えられていた。それは

スマス經濟學の發展に對するリカアドの時代の要求であつた。國富増進に重點をおくスマス經濟學では、産業革命を経過した十九世紀初頭の問題解決に應ずることができなかつたからである。ところがリカアドは問題を轉換するにあたり、スマス經濟學の生産論の検討を十分には果さなかつた。それには深く立入らないで、價值論を分配論の基礎理論として研究したにとどまる。しかし實は價值論は生産論に根をおいており、生産論を十分に固めなければ、價值論は説けないし、従つて分配論も解決できない。これはリカアドの體系の事實上の困難となつて現われた。

マルクス經濟學はリカアドのこの失敗を出發點とする。従つてケネー、スマスの生産論を徹底的に検討することが何よりも必要であつた。そして生産論の研究はその本質的部分において價值論であることが明かとされた。價值は生産され實現される。交換價值として實現されるには、價值は生産されなければならぬ。價值形成の生産行程を除いては、價值實現の行程は把握できない。リカアドは勞働價值學説をとりながら、價值形成の行程を十分に研究することを怠つた。財貨の價值はそれを生産するに必要な勞働量によつて決定するといふことは、それが自身が最も基本的な生産論なのだから、交換價值や分配の問題に入る前に、その點を十分に研究すべきであつた。リカアドにおいて價值の源泉乃至原因が議論されているのは、實はそれが價值生産論なのであるが、これが生産論として自覺的に、十分に扱われていなかつた。リカアドの價值論は價值尺度論であり、従つて交換論だけだと極論するのは誤であるが、價值生産論が自覺的に、十分に説かれなかつたことも事實である。後に價值と富との對立を中心として生産力の問題を説きながらも、時代が解決を迫る課題は、彼をしてむしろ自覺的に生産論の問題を避けしめたのかも知れない。

しかし價值生産論がリカアドによつて十分に研究されていたならば、價值をつくる労働の性質、絶對價值の問題、使用價值をつくる労働と價值をつくる労働の區別、商品における使用價值と價值の對立、不變資本と可變資本の區別等が明かにされていたであらう。

次に剩餘價值の追及はマルクスをリカアドと分つ第二の決定點である。労働價值學說からすれば、利潤は當然剩餘價值であるようであるが、リカアドは利潤をその點から規定しなかつた。分配關係において賃金と利潤は相反的であり、生産物價值から労働者の生活費によつて決定される賃金を差引いた残額が利潤となると考えられた。このリカアド説には三つの注意すべき點がある。

第一、ここでは生産は労働のみによつて行われ、物的資本は全然用いられないと假定されていることになる。そうでなければ得られた生産物價值のうちには物的資本の消耗部分が含まれていなければならぬはずであり、そうなれば得られた生産物價值に對し、賃金と利潤とが單純に相反關係に立たなくなる。そこでリカアドは固定資本の使用から生ずる價值修正について苦しい議論をしなければならなかつた。物的資本を全く使用しない場合という、マルクス流にいはば不變資本を用いず可變資本だけで生産する場合となる。剩餘労働は生ける労働、即ち可變資本に對しては剩餘價值であり、不變資本と可變資本を合せた總資本との關係では利潤であるが、この場合不變資本は零と假定されているのだから、利潤として扱われているものは内容的には剩餘價值である。

そこでマルクスはいう、リカアドは全資本が直接に賃金に投ぜられているかのように問題を取扱つてゐる。それ故にしかるかぎりにおいて、彼は剩餘價值を考察し利潤を考察してゐるのではないのであつて、従つて彼においては剩餘價值の理論について語られうるのである。しかるに他方において彼は利潤そのものについて述べてい

ると信じ、實際には剩餘價值の前提ではなく、利潤の前提から出發する觀點が至るところに入込んでゐる。彼は剩餘價值の法則を正しく説いてゐるところでも、それを直接に利潤の法則として述べることに、廢物としてゐる。他方において彼は利潤の法則を、直接に、中間物抜きに、剩餘價值の法則として説明せんとしてゐる。

またマルクスは次のように論じてゐる。即ち剩餘價值が與えられてゐる場合に、種々な原因が利潤を騰貴あるいは下落せしめ、一般に影響するということを、リカアドは看過してゐる。彼は剩餘價值と利潤とを混同してゐるから、利潤率の騰落が剩餘價值率を騰落せしめる事情によつてのみ制約せられると當然證明しようとする。更に彼が看過してゐることは、——剩餘價值の分量が與えられてゐるとき、利潤量には影響しなくとも利潤率に影響する諸事情を除けば——利潤率は剩餘價值量に依存し、決して剩餘價值率には依存しないということである。

第二、賃金と利潤の相反により分配關係において示された勞資の對立は、生産關係にまで掘り下げられずして終つた。彼の扱つてゐる利潤が實は剩餘價值でありながら、それを反省しなかつたということは、利潤の根源、從つて剩餘價值形成の事情をつきとめなかつたからである。これは結局マルクスに残された課題となつた。

このようにリカアドとマルクスとを並べると、當然に、おのずからリカアドよりマルクスに進むようであるがこの推移には剩餘價值を確認する一點において、思い切つた飛躍が必要であつたのである。兩者の論理は當然に結びつくようであるが、ここにリカアドの經濟學だけでは、これをいかに推してみても、越ゆべからざる障壁があり、これを越えるために、ホヂスキンの先驅的、仲介的思想が必要であつたのである。それはマルクス理論にとつて何らかの内容となるものというよりも、新しい方向に路を開く態勢を指示する意味をもつにとどまるも

のであつたが、ケネー以後の生産論を詳細に検討したマルクスにとつては、それが必要であり、またそれだけで十分であつたのである。

第三に剰餘價值形成の生産論への掘下げが不十分であつたことから、労働と労働力の區別を導きだすことができず、これがリカアドの價值論を混亂に陥らせた。利潤は生産物價值から労働者の生計費を差引いた残額であるといふところまでは分つたが、それを生産されたる剰餘價值と斷定しなかつたのは、一方において生産關係における對立の認識が得られなかつたことによるが、また他方において労働價值學説における等價交換の理論に自縛されたからである。資本主義社會では労働力は商品として賣買されるのであり、従つて労働と労働力とは嚴別されなければならぬ。労働力の取引はこれを利用するところの資本との交換となるが、労働力と資本との交換は労働力を買取る資本家がこれを資本主義的生産に利用するために買取るのだから、不等價交換である。にもかかわらず、等價值の原則をここにも貫かんとするのだから體系は混亂する。だからリカアドは利潤の出どころを追及せず、それは與えられた事實として鵜呑みにせざるを得ない。マルクスもこの點について、リカアドでは生産物の價值が賃金の價值より大であるといふことは事實である。この事實がいかにして生ずるかは、不明のままに残されている、と述べている。²⁾

エンゲルスはリカアド學派が剰餘價值の問題で行詰つたについて、二つの難點をあげた。これはマルクスによつて初めて解かれたところである。

第一、労働は價值の尺度である。しかるに生きた労働が資本と交換されるのには、それはそれが交換されることの對象化された労働よりは、より小さい價值をもつてゐる。一定量の生きた労働の價值である賃金は、同一

量の生きた労働によつて生産され、あるいはそのうちに同一量の労働量が表現されている生産物の價值よりつねに小である。この問題はこのように把握されると、實際解決しえないものである。マルクスはこの問題を正しく提出して解答した。即ち價值をもつものは労働ではなく労働力である。商品として賣買されるのは労働ではなく労働力である。労働力が商品となるやいなや、その價值は社會的生產物としてこの商品に體化された労働によることになり、これは價值法則と矛盾しない。リカアドおよびその學派はこの點を理解しなかつた。

第二、リカアドの價值法則では等量の生きた労働を用いる二資本は、他の事情にして變化なきかぎり、同一の期間に同じ價值の生産物を生産し、また等量の利潤を生産する。しかるに不等量の労働を用いるならば、これらの資本は等量の利潤を生産しえない。ところが實際に現われるところは反對である。即ち等量の各資本はどれだけの生きた労働を用いるかに關係なく、事實上同一の期間に平均して等量の利潤を生産する。ここに價值法則との矛盾がある。この矛盾はリカアドおよびその學派には解けなかつた。ロートベルトウスもこの問題を解決してゐない。マルクスはこの問題を解いた、といふのである。

第一の點は労働と労働力の區別、労働と資本との交換の問題である。第二の點は生産において形成された剩餘價值が利潤として交換、分配關係に實現する問題である。リカアドは生産の規定に立入らないのだから、この問題が解けないのは當然である。

以上生産問題と剩餘價值問題について、リカアドの掘り下げ方が足りなかつたといふことは、マルクスの立場からいえるのであつて、必ずしもリカアド經濟學の方向ではない。兩者を結びつけて兩者の掘り下げ方の程度の差を比較するよりも、兩者の質的相違が重要である。リカアドは晩年彼の經濟學について若干の疑念を懷くように

なつていたが、それかといつて彼が長生したならば、マルクス經濟學のごときものに發展したとは思われない。もしそうするならばリカアド經濟學の革命である。これを敢行したマルクスにはリカアドと質的に異なるものがあつたのである。それはマルクスの唯物史觀として體系化された社會觀であるが、價值論においては歴史的經驗の發展となつて現われた。

リカアドは價值ばかりでなく、經濟を經驗事實について扱つたが、それを固定的なもの、永久的なものとして扱つた。しかるにマルクスにおいてはすべては歴史的發展の過程のうちにおいてとらえられた。この場合には生産關係を固定しておいて、流通部面だけの關係、變化だけを問題とすることはできない。従つて生産論の問題提起そのものが歴史的觀點からなされたのである。問題の解決もとより當然この立場を貫いた。マルクスにおいては價值そのものがすでに歴史的性質を有したが、労働と労働力の區別も資本主義生産社會を前提として初めて現われることが明かたされ、この點から、剩餘價值形成の問題も解かれた。

しかし剩餘價值の問題は價值の理論から順を追うて、やがて、はからずも到達され發見されたものであるというよりも、それ自身が最初から新しい經驗的事實の問題として浮び上つていたようである。もとより説明の順序は『資本論』において見られるように價值より始められ、やがて剩餘價值の理論に發展しているが、研究は逆に剩餘價值問題の解決を最初から念頭におき、宿題としてもちながら、價值の規定まで遡らざるを得なかつたのである。説明の順序は研究の順序とは逆である。

アダム・スミスにおいては労働價值が近代社會における歴史的經驗として把握されており、リカアドはこれを繼承したが、マルクスにおいては更に資本主義經濟の矛盾期の歴史的經驗が剩餘價值として現われていたのであ

る。これは單純な直觀によつて認識されるというものでなく、時代の廣汎な基礎的な經驗である。それは獨斷的前提ではないが、經濟學研究の出發點となるとともに、その本質が説明さるべき問題である。リカアドにはこの經驗が把握されていなかった。彼が利潤の形で剩餘價値を推論しておりながら、事實それに無關心であつたのはそのためである。ホヂスキ等三人のパンフレット作者、リカアド派社會主義者等にはこの經驗が把握されていたが、それは生のままの生活經驗にとどまり、説明されてはいなかつた。だから彼等は空想的社會主義者たるに終つた。その本質はマルクスに至り残りくまなく説明されたのである。

- 1) Marx, Theorien über den Mehrwert, II, 1 SS, 97~98, S. 101.
- 2) Marx, op. cit. S. 126.
- 3) Marx, Das Kapital, II, Engels' Vorwort, SS. XXI~XXII.